

ハンガリーと56年ぶり 縁復活

東京五輪開会式で先導 始良の川井田さん

市在住の出身者と対面 元旗手の健在判明

半世紀の時を超え、縁再び——。前回東京五輪（1964年）開会式で、ハンガリー選手団を先導した始良市の川井田一郎さん（76）が先月、市内在住のハンガリー人、サンディー・ユハスさん（38）と初対面した。歓談の中で、当時知り合った選手団の男性に会いたいと伝えると、サンディーさんの尽力で今月、男性が健在と分かった。川井田さんは連絡を取り合える日を心待ちにしている。

同市出身の川井田さんは、高校卒業後、防衛大学校に進学。その2年の時、東京五輪の式典で各国選手団の先導役を同校生が担うことになり、参加した90を超える国・地域のうちのハンガリー担当に選ばれたという。

一方、サンディーさんは結婚を機に同市に移住。日本とハンガリーの外交関係開設150周年だった昨年、日本語の古本を集め、母国に無償で送るプロジェクトを企画し、約2万冊の寄贈を成功させた。2人をつないだのが、鹿児島工業高等専門学校（霧島市）の堤隆教授（58）。川井田さんが同校学生寮の舎監だった数年前、寮生が発行した文芸誌に東京五輪の体験記を寄稿していたのがきっかけ。サンディーさんの活躍も知り、間を取り持ったという。

縁が縁を呼び、2人は3月26日に始良市内で初対面した。



▲ハンガリーのプラカードをもつ川井田一郎さん（中央、いずれも本人提供）

▲前回東京五輪の際、一緒に写真におさまった川井田さん（右）とハンガリー選手団旗手の男性



前回東京五輪の写真などを見ながら歓談する川井田さん（右）とサンディーさん＝3月26日、始良市

五輪は国威を示す行事。ピシッ、としていなければならなかったからね」

開会式は厳かな雰囲気包まれたが、閉会式は「和やかで、選手団の高揚した気分が直立し続ける我々にも伝わってきた」。一緒に記念写真も撮った。

選手団で旗手を務めた長身の男性とは、片言のドイツ語と身ぶり手ぶりで気持ちを伝え合った。ただ、当時は東西冷戦下。日本とは違う「東側」だったハンガリーの選手と、五輪後に連絡を取り合うことは難しかったという。

「お元気ならお会いしたい」。川井田さんはそう言っ、この男性がメモ帳に書いてくれた名前と住所をサンディーさんに託し、この日の対面を終えた。

その後、サンディーさんがSNSで情報収集を始めると、4月中旬に母国から吉報が届いた。新型コロナウイルスの影響による外出制限で、直接の連絡は取りづらい状況だが、男性は80歳ぐらいで健在だと分かったという。川井田さんは「ありがたい。早くコロナが終息し、連絡が取れるとうれしい」。サンディーさんは「2人が実際に会えればいいが、インターネットのテレビ電話という方法もある」と話している。

川井田さんは笑顔で切り出すと、倉庫にしまい込んでいたという古いアルバムを広げ、説明を始めた。開会式では白のスラックスに、紺の上着姿。ハンガリーの国名が書かれたプラカードを掲げ、選手団の先頭に立って行進した。その様子をおさめた写真を見たサンディーさんが「カッコいいですね、緊張しませんでしたか」と返すと、いきいきと当時は振り返った。本番前の約100日間、直立不動で約2時間は一点を見つめて立ち続けられるように訓練した。「当時の

ライター・知覧哲郎